

ダニエル書 - 第三百三十四号

預言の展開：2001年9月11日から米国における差し迫る日曜法まで

Jeff Pippenger

2024-03-13

2001年9月11日から米国で間もなく制定される日曜法に至るまでの、十四万四千の者の封印の時は、終末の時代に神の御言葉のすべての幻が成就する預言的な期間である。

それゆえ、彼らに言え、主なる神はこう仰せられる、わたしはこのことわざをやめさせ、彼らはもはやイスラエルでそれをことわざとして用いない。しかし、彼らに言え、「日は近い、すべての幻の成就もまた近い」と、エゼキエル書12章23節

その系列では第三の天使が再び到来し、そのことは、1844年10月22日の第三の天使の到来から1863年の反逆に至るまでの出来事によって表されている。1863年の反逆は、古代イスラエルがカデシュで最初に起こした反逆によって表されており、したがって、紅海を渡ってから最初のカデシュの反逆に至るまでの全歴史によって表されている。最初のカデシュの反逆は第二のカデシュの反逆の予型であり、このように、アロンの死から第二のカデシュの反逆に至るまでの系列が、封印の系列において繰り返される。

それは、1840年から1844年にかけてのミラー派の歴史において繰り返され、キリストの洗礼から十字架に至る出来事によって象徴され、さらに十字架からステパノの石打ちに至る歴史をも表していた。行に行を重ねて、古の預言者たちは皆、この期間について、自分たちの生きた時代以上に多く語った。

「古代の預言者たちは、それぞれ自分たちの時代のためというよりも、むしろ私たちの時代のために語ったのであり、それゆえ、彼らの預言は私たちに対して効力を有している。『これらのことが彼らに起こしたのは、私たちへの戒めのための実例としてであって、それが書き記されたのは、世の終わりに臨んでいる私たちを戒めるためである。』コリント人への第一の手紙 10:11。『彼らが務めたのは自分たちのためではなく、あなたがたのためであったことが示されたのである。そしてそのことは、今や、天から遣わされた聖霊によってあなたがたに福音を宣べ伝えた人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのであり、それは御使いたちも、うかがい見たいと願っている事柄である。』ペテロの第一の手紙 1:12。……」

「聖書は、この最後の世代のために、その宝を蓄え、ひとまとめに束ねてきた。旧約聖書の歴史におけるすべての偉大な出来事と厳粛な事柄は、この終わりの時代の教会において、これまでも、そして今もなお、繰り返されている。」『セレクトッド・メッセージズ』第3巻、338、339頁。

「最後の世代」とは、ペテロの言う「選ばれた世代」であり、すなわち十四万四千人のことである。彼らは2001年9月11日から間もなく到来する日曜法に至る時期において選ばれ、そのとき彼らは旗印として高く掲げられる。「すべて」—一部ではなく—神の言葉の「すべての大いなる出来事と厳粛な事柄」が、「終わりの時代」の「教会」の「最後の世代」において「繰り返されている」。封印の流れにおいては、聖書のすべての書がそこで

出会い、終わりを迎える。

『黙示録』において、聖書のすべての書は合流し、完結する。ここで『ダニエル書』は補完される。一方は預言、他方は啓示である。封印されたのは『黙示録』ではなく、終わりの時に関する『ダニエル書』の預言の部分である。御使いは命じた、「しかしあなたは、ダニエルよ、このことばを秘め、書を封じよ。終わりの時まで。」ダニエル書12章4節。『使徒行伝』585頁。

封印が解かれた「終わりの時に関するダニエルの預言の一部分」とは、シナルの二つの大河、ウライとヒデケルのほとりでダニエルに与えられた諸々の幻である。これらの幻は、ダニエル書8章13-14節と11章40-45節に当たる。十四万四千人の封印の時は、天の大祭司であるキリストが、最後の世代の選ばれた者たちを、神性と人性の結合から成る関係のうちに永遠に封印するという歴史である。ダニエル書11章40節は、いま世界をハルマゲドンへと導いている竜と獣と偽預言者の関係を明らかにしており、これは、40節の時代において、聖書預言の第六の王国として支配する地の獣の上にある共和主義の角の歴史によって表されている。40節はまた、同じ時代において、1798年に始まり間もなく来る日曜法に至るまで、プロテスタント主義の角の歴史を特徴づける賢い者と愚かな者の分離も示している。

「聖書の諸書」はすべて黙示録の中で「出会い、完結する」。そしてそれらが出会うとき、黙示録はダニエル書を「補完」し、この「補完」とは、完成へと至らせることを意味する。黙示録に描かれている十四万四千人の封印の時に、終わりの時に封印が解かれたダニエル書の預言は、行に行を重ねて結び合わされ、1～3節の声に始まり4節の第二の声で終わる黙示録18章に示される歴史の流れに沿って、完成へと導かれる。

ダニエル書でヒデケル川によって表されている預言の幻の完全さは、聖所と軍勢を踏みじめる神の民の敵の外面的な幻の完全さを表している。ダニエル書でウライ川によって表されている預言の幻の完全さは、最後に選ばれた世代において神性と人性を結合するという契約の約束を成就してキリストが御自分の民のうちに現れるときの、内面的な幻の完全さを表している。

地の獣の共和主義の角に焦点を当てた封印の歴史は、2001年に地の獣が愛国者法を語ったことから始まり、1798年の外国人・治安諸法によって表された語りで終わる。ヨハネの黙示録第十三章において、それは地の獣が竜のように語ることで表現されている。1798年の外国人・治安諸法は、1776年に独立宣言が語られたことから始まった一連の流れの終わりを表している。その預言的歴史の中ほどにあたる1789年には、地の獣が憲法を語って発効させた。

1776年における「語り」はパトリオット法における「語り」と一致し、外国人・治安諸法は、アメリカ合衆国において間もなく来る日曜法を表している。その歴史の間には、1789年に符合するもう一つの「語り」があるはずである。黙示録18章1～3節の第一の声は、ニューヨーク市の巨大な建造物が崩れ落ちたときに到来したものとして明確に特定されている。4節の第二の声もまた、間もなく到来する日曜法であると明確に特定されている。これら二つの声はいずれも神の声である。というのも、いずれも、その栄光によって地を照らす天使の声であり、ホワイト夫人が黙示録14章の第一の天使と同定している天

使だからである。イエスは第一の天使であり、彼はつねに物事の終わりをその初めによって示すので、彼はまた第三の天使でもあり、その栄光によって地を照らす天使である。

第一の天使はまた、黙示録10章において、1840年8月11日に降臨するものとして描かれており、それによって2001年9月11日の天使の降臨を予表している。ホワイト姉妹は、10章で降臨した天使は「イエス・キリストその方にほかならない」と明言している。黙示録18章の第一の声と第二の声は、キリストの声である。その歴史は、地の獣が三度語った1776年、1789年、1798年によって予表されている。黙示録18章の二つの声の間で語るキリストの声は、彼が黙示録11章で語るときのことである。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに上って来なさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12。

2023年7月、天からの声（キリストの声）が、底知れぬ淵から上ってきた無神論の竜によって街路で殺されていた二人の証人をよみがえらせ始めた。その時点で、アメリカ合衆国憲法に関連する諸問題が預言的主題となった。というのも、1798年に象徴される次の声するとき、憲法は完全に覆されるからである。1776年、1789年、1798年という三つの道標は、2001年9月11日、2023年7月、そして間もなく到来する日曜法として記されている三つの神の声と一致している。

それら三つの段階は、第三の災いの三つの段階と一致しており、2001年9月11日、2023年10月7日、そして「大地震」の時に第三の災いである第七のラツパが突然到来する、間もなく来る日曜法によって表されている。ネブカドネザルの像に関する秘密の夢に表されているように、2023年には、地の獣の二本の角の転換が始まった。ダニエル書2章にあるネブカドネザルの夢は、神だけが明らかにできる秘密であり、神はそれを、ダニエル書1章で示されている最初の試験に合格した者たちに明らかにした。

第一章で最初の試練に打ち勝ったダニエルと三人の勇士は、天の食物を食べることを選び、バビロンの食事を拒んだ者たちである。彼らは、黙示録十章で、イエス・キリストにほかならない天使の手から小さな書を取り、その中に含まれるメッセージを食べる者たちとして、ヨハネにより描かれている。彼らはまた、ヨハネの福音書六章において、他の人々がそれを拒み、そののちキリストから離れて二度と彼と共に歩まなかったのとは対照的に（六章六十六節）、天のマナの肉を食べ、その血を飲むことを選んだ者たちである。

その時キリストはガリラヤで教えておられた。ガリラヤは「蝶番」あるいは「転換点」を意味する。そこでキリストは、弟子たちが食べるべき天のマナのメッセージを提示された。これは、ヨハネが黙示録10章で、エゼキエルがエゼキエル書3章で、そしてエレミヤがエレミヤ書15章で食べたのと同様であった。ヨハネが小さな巻物を食べた黙示録10章で表されている歴史は、1840年から1844年にかけてのミラー派の歴史を表しているが、それはミラー派の歴史よりもむしろ、十四万四千人の封印の期間をより直接的に表している。これは、小さな巻物を食べると言われたときにヨハネに与えられた指示によって、その章の中で明らかである。

そこで私は天使のところへ行き、彼に言った。「その小さな巻物を私にください。」彼は私に言った。「取って食べなさい。そうすれば、それはあなたの腹を苦くするが、あなたの口には蜜のように甘い。」ヨハネの黙示録 10:9

その節において、ヨハネは小さな巻物を取って食べる前に、自分が食べるそのメッセージによってどのような経験がもたらされるかを前もって告げられていた。ミラー派は、自分たちの預言史がヨハネの象徴を歴史的に成就する以前に、その甘くて苦い経験を理解していなかった。しかし、十四万四千人には前もって告げられており、知っていることが求められている。ヨハネが第一の天使の運動の歴史、あるいは第三の天使の歴史を描くとき、そのメッセージは礼拝者を二つの種類に分け、そして最後には苦い失望で終わる。エレミヤが小さな巻物を食べたとき、彼は「あざける者たちの会衆」と交わることを拒んだ。

私はあざける者たちの集いに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手のゆえに、私はひとりで座っていた。あなたが私を憤りで満たされたからだ。エレミヤ書 15:17.

エゼキエルが小さな巻物を食べたとき、彼は、聞こうとしないイスラエルの家の反逆者たちにその言葉を伝えるよう告げられた。

また、彼はわたしに言った。人の子よ、見つけるものを食べよ。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語れ。……しかしイスラエルの家はあなたに耳を傾けない。彼らはわたしにも耳を傾けないからである。イスラエルの家はみな厚かましく、心が頑なだからである。エゼキエル書 3:1,7

キリストが、天からのパン、すなわちご自身の肉と血を、彼の故郷ガリラヤの教会に差し出されたとき、背を向けた階級は二度と彼と共に歩むことはなかった。そして、これが第六章六十六節で起こったという事実は、食べることが、天使の降臨から始まる三段階の試験過程の第一段階であることを示している。第二の試験は、二つの階級が顕れる段階であり、たとえば心のかたくななイスラエルの家とエゼキエルとの対比であれ、アドベンチズムの始まりと終わりの双方における賢いおとめと愚かなおとめであれ、嘲る者たちの会衆とエレミヤとの対比であれ、あるいはダニエル書第二章において、ダニエルと三人の勇士がバビロンの賢者たちと対比されることによってであれ。

ヨハネによる福音書6章の筋に沿えば、ガリラヤへの到着は2001年9月11日に当たる。肉を食べ、血を飲むというメッセージは、やがて間もなく制定される日曜法へと最終的に至る歴史である。「人は食べたものでできている」とは、ダニエル書1章のダニエルと三人の若者によって示されているが、ヨハネ6章でも、キリストの肉を食べ、その血を飲むことを選んだ者たちは、彼らが食べたものの像となった。彼らはキリストの像となり、一方、背を向けてもはやキリストと共に歩まなかったもう一方の人々は、獣の像を現した。一方は創造主の像、もう一方は被造物の像であった。ヨハネ6章は、2001年9月11日に「ガリラヤ」という意味を付与する。というのも、「ガリラヤ」の意味は「蝶番」であり、それゆえそれは弟子たちにとっての転換点を画するからである。彼らは天の食物に向き直るのか、それともバビロンの食物に向かうのか。予言的な転換点においてこそ、キリストは次の時期のための光を顕される。2001年における御降臨によって示されているように、そのとき地はその栄光によって照らされた。

過去の歴史から学ぶべき教訓がある。これらに注意が喚起されるのは、神が今も昔と変わらぬ同じやり方で働いておられることを、すべての人が理解するためである。神の御手は、御業のうちに、また諸国民の間において、今も見て取ることができる。それは、エデンでアダムに福音が最初に宣べ伝えられて以来、ずっと変わらない。

国々の歴史や教会の歴史には、転機となる時期がある。神の摂理により、こうしたさまざまな危機が到来するときには、その時にふさわしい光が与えられる。それを受け入れるなら霊的な前進があり、拒むなら霊的な衰退と難破が後を追う。主はみことばのうちに、福音の積極的な働きが過去にどのように進められてきたか、また将来いかに進められるかを、サタンの諸勢力が最後の驚くべき動きをする最後の闘いに至るまで、明らかにしておられる。Bible Echo, 1895年8月26日。

神は常に過去の歴史と同じ原則で働かれ、決して変わらない。「転換点」（ガリラヤ）があり、それは「危機」であり、その「転換点」において「その時のための光が与えられる」。十四万四千人が封印される期間のための光は、2001年9月11日に始まった危機において与えられた。その光が「受け入れられるなら、霊的な前進がある。拒まれるなら、霊的な衰退と難破が続く」。その光は二つの種類の礼拝者を生み出す。転換点に続く光は、二つの種類の礼拝者を生み出すメッセージを表している。

ダニエル書2章は、第1章の食事の試練に続く第2の試練を示している。ダニエル書1章1節では、ユダはネブカドネツアルに征服されたばかりであり、彼の王国は聖書の預言における第一の王国となった。それは諸国史と教会史の双方における転換点であり、大いなる危機であったが、その時に食事の試練に関する光が与えられた。ダニエルと三人の忠実な者たちはその試練に合格し、そして続く2章で、彼らは再び第二の試練に合格した者たちを代表した。第二の試練は、人間には誰一人として、ネブカドネツアルでさえも知らなかった秘密をめぐる試練であった。

試練の象徴は、ネブカドネザルの夢に現れた像であった。それは、誰も知らなかった像をめぐる生死を分ける試練であった。その像は聖書の預言における諸王国を示しており、ダニエル書の七章と八章では、ダニエル書二章の同じ諸王国が獣として表されている。ネブカドネザルの試練は「獣の像」をめぐる試練であり、この試練は終わりの時代に、十四万四千人への封印の期間に起こる。

終わりの時代には、ダニエルと三人の勇士によって代表される神の民にとって、獣の像の形成が大いなる試練となる。これは彼らが封印を受ける前に通過しなければならない試練であり、ゆえに、それは封印の試験のメッセージであって、神の印を受けて神の像を反映する一群の人々を生み出すか、あるいは獣の印を受け、したがって獣の像を反映する一群の人々を生み出すかのいずれかをもたらす。ダニエル書二章では、獣の像に関するメッセージは、生死を分ける問題となる時代に至るまで封じられていた。ネブカドネザルの像についてはミラー派が正しく理解していたが、封印の歴史において、その像に結びつく秘められた真理が解き明かされる。ただし、それは転換点が到来したときに食べるべきであったメッセージを受け入れた者にのみ明らかにされる。

その食物は、黙示録18章の天使が降りてきたときに始まった後の雨のメッセージであり、後の雨のメッセージとは行に行を重ねる方法論である。その真理を食さなければ、獣の

像の形成に関する隠されたメッセージは見えない。

エレン・ホワイトには「恵みの時が閉じられる前に獣の像が形成される」ことがはっきり示された。ダニエル書2章における獣の像の形成に関するメッセージは、「転換点」以後、すなわちその時に光が与えられて初めて歴史の中でのみ見えてくる像の形成を表している。ネブカドネツアルの像について現在理解されているのは、それが聖書預言の最初の四つの王国を示すだけでなく、八つすべての王国を示しており、その理解が獣の像の新たな形成を生み出すということである。

その真理は、第八の獣が七つに属するものであることを示し、さらに、まず獣の像を造り、その後全世界に同じことを強いるアメリカ合衆国が、自らが像を造るその獣の預言的な特質を持つことになることも明らかにしている。その像には、自らが第八であり七つに属するということが含まれており、また、キリストの三つの声の歴史において、それは2001年9月11日の転換点と、2023年に二人の証人の死んで乾いた骨を立ち上がらせる声と、バビロンから出よという呼び声を指し示している。

2023年の声は、ネブカドネザルの像の秘密と、それがいつ語るのかを明らかにする声である。

2001年9月11日は、その時点で始まり、2020年7月18日に終わる期間を表している。第十一章の第二の声の期間は、2020年7月18日から、間もなく到来する日曜法における第三の声に至るまでの期間を表している。2020年7月18日に始まる第二の期間には、2020年11月3日の道標と、2021年1月6日の道標（二人の証人を殺した者たちが喜び祝い始め、贈り物を送り始めたとき）が含まれ、さらに、2023年7月（荒野で呼ばれる声が第七のラッパの警告を鳴らし始めたとき）も含まれる。

次回の記事でこの研究を続けます。

ケバル川のほとりで、エゼキエルは北の方から来るかのようなつむじ風を見た。「大きな雲、そして自らを包み込む火があり、そのまわりには輝きがあり、その中からは琥珀のような色が現れていた。」いくつもの車輪が互いに交差し、四つの生き物によって動かされていた。これらすべてのはるか上には「サファイアの石のような外観の御座のかたちがあり、その御座のかたちの上には、人の姿のようなものがあつた。」また、「ケルブたちには、その翼の下に人の手の形が見えた。」エゼキエル 1:4, 26; 10:8。車輪は配置があまりに複雑で、ひと目には混乱しているように見えたが、完全な調和のうちに動いていた。ケルブの翼の下にあるその手に支えられ導かれた天上の存在たちが、これらの車輪を推し進めていた。その上、サファイアの御座には永遠の御方がおられ、御座のまわりには神のあわれみのしるしである虹があつた。

車輪のように複雑なものがケルビムの翼の下にある手の導きに従っていたように、人間の出来事の複雑な推移もまた神の統御のもとにある。諸国の争いと騒乱のただ中にあつても、ケルビムの上に座しておられる方は、いまなお地上の事柄を導いておられる。

それぞれに割り当てられた時と場所を次々に占め、自らはその意味を知らぬままその真理の証しとなってきた諸国の歴史は、私たちに語りかけている。今日のすべての国

々とすべての個人に、神はご自身の大いなる計画の中でそれぞれの位置を定めておられる。過ちのない方の御手にある測り縄によって、今日、人々も国々も量られている。すべての者は自らの選択によって自らの運命を定めており、神はご自身の目的を成就するために、すべてを御旨のもとに治めておられる。

大いなる「わたしはある」お方が御言葉のうちに示し、過去の永遠から未来の永遠に至るまで、預言の鎖の環を次々に結び合わせてこられた歴史は、時代の行進の中で今日の私たちがどこにいるのか、そしてこれからの時に何が予期されるのかを教えている。これまで、成就すべきこととして預言が前もって告げたすべては、現在に至るまで歴史のページに跡づけられてきた。ゆえに、なお将来に属するすべての事柄も、その順序に従って必ず成就することを、私たちは確信できる。『教育』177、178頁。